

2-1-9 個人の問題意識

2009年度の東京大学によるヒアリング調査をもとに、住民が認識している問題点を整理する。ヒアリング調査は計13人を対象として行った(表2-3)。

NO.	ヒアリング実施日	対象者
1	2009年5月22日	大越商工会青年部
2	2009年5月22日	一般住民(まちづくりに関心のある)
3	2009年5月22日	大越町観光協会
4	2009年5月23日	まちづくり組織(鳴神華の会)
5	2009年6月26日	大越行政局市民課
6	2009年6月26日	一般住民(アーティスト活動)
7	2009年6月27日	まちづくり組織(我が里を考える会)
8	2009年6月27日	大越商工会
9	2009年6月28日	まちづくり組織(牧野ひまわり会)
10	2009年7月24日	農家(早稲川在住)
11	2009年7月24日	町史の編纂者
12	2010年2月2日	鬼太鼓保存会
13	2010年2月2日	農家(栗出在住)

表2-3 2009年度のヒアリング

ヒアリング調査¹¹によると、大越地域のまちについて問題意識を持っている人が多い。出来ることなら大越で暮らしていきたいが若い世代の雇用がないという問題意識を抱き、地域の力で何か行動しなくてはいけないと感じている意見も多くあった。個人や、地元住民で手を組み、まちづくり活動を行っている例も多くあるが、どの団体も根本的な大越全域の問題というのが今後の活動に対する不安要素となっている。また田村市となり、中心が大越町役場から田村市となったことで、行政に対して無関心となるという傾向もある。しかし大きな問題意識を抱いている一方で、生活には大型スーパーには自動車で行くことができ、生活する上ではあまり困らないという意見も多くあった。

¹¹大越住民へのヒアリングから[巻末資料 ヒアリング 2009]

つまり、工場の操業停止に伴い産業の衰退と雇用の減少、高齢化の問題などを理由に、大越で暮らして行くことに対しては住民の危機感となっはいるが、短期間で解決できる問題でないため、個人が大越全域に対して問題意識を持った上で、活動することは難しいといえる。

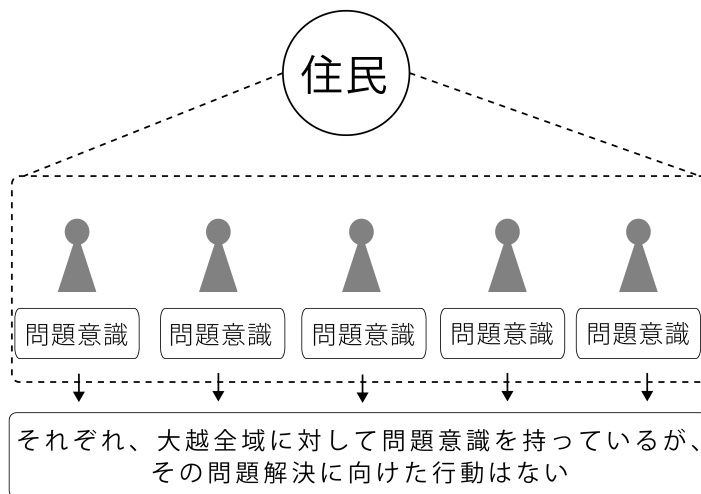


図 2-12 個人の問題意識と行動

—まとめ—

住民個人での活動

住民個人では、大越地域の働き口の少なさに対しての危機感、生活サービスの低下などの問題意識を抱いている声が多かった。しかし、それに向けて個人では問題解決に向けた行動は難しいといえる。

2-2 住民組織活動からみる問題

ここでは、住民の組織活動について着目する。個人では大越地域の問題も解決されないが、活動がみられる住民組織では問題解決に向かっているのか、活動する住民が問題解決に向かっていると認識しているのかを、主にヒアリング調査から明らかにしている。大越地域では、地縁組織やまちづくり組織が活動をしている。調査によると、この地縁組織とまちづくり組織は、時代の移り変わりにより活動内容や活動目的の変化が明らかとなった。

2-2-1 地縁組織

大越地域内のコミュニティを把握する上で、歴史のある地縁組織についてヒアリング調査と文献調査を行った。まず住民組織結成の過程を明らかにし、次に住民組織活動の種別を行う。

■地縁組織結成の歴史

明治時代

大越町史によると、明治時代には、青年会など今でも残る組織があったとされる。農会、労働組合、また当時葉たばこ産業が盛んであったため、葉たばこ組合もあった。例として白山青年会は 1900 年冬に結成され、活動としては小学校講師を講師に迎え夜学会と呼ばれる学科研究（読方、作文、算術）を行っていた。

大正時代～昭和時代（戦前）

町郷青年会、戸ノ内青年会、小久地青年会、西部青年会、東部青年向学会、田子屋労働団などが組織されており、勤労と農事研究、教養の向上を目的として活動に励んでいた。青年団は、大越村を 1 団体として結成した。上大越に 9 つ、下大越に 7 つの支部を置いた。大越村青年団は、団員の結束が強いことを誇りとして、講演会、旅行、運動会、遠足、剣道、盆踊りなど数多くの事業を行っていた。昭和になると青年団活動は、戦時体制に組み込まれていった。

昭和時代（戦後）

戦後まもなく、1946 年には大越町青年団が発足している。青年団は 15 歳以上 25 歳までの者によって組織されていた。田村郡連合青年団は 1946 年に結成された。一時は国より禁止された地縁組織活動であるが、戦前からの地縁コミュニティの結束は強く、自然と活動が継承されたといえる。また、老人会や婦人会などの活動も行われるようになった。その地縁組織も、人口流出や高齢化の問題、生活スタイルの変化から、活動は困難となり、解散されるようになった。また、戦後しばらくの間まで結という農家の仕組みが残されていた。結の仕組みなしでは農作業は成り立たなかったが、農作業の機械化が進むと結の習慣もなくなっていった。

■活動の種類

青年会・若連・同志会

青年団として活動した後の25歳から42歳までが加入する組織である。町郷青年会、戸ノ内青年会、小久地青年会、西部青年会、東部青年向学会、田子屋労働団などの大部分は集落単位で組織されており、勤労と農事研究、教養の向上を目的として活動に励んでいた。

例：白山青年会

1900年の冬に結成。小学校講師を講師に迎え、学科研究（読方、作文、算術）をした。（夜学会）。当初は集落単位である山口・白石が中心で活動しており、五斗蒔、水神宮の後、薬師堂、求中住民ものちに含まれるようになった。五斗蒔、水神宮はセメント工場従業員が住み始めた地域である。水神宮はもともと畑であったが、セメント工場の資材置き場、グラウンドを経て、現在の大越行政局が建った場所とされる。白山区求中は1970年ごろに誕生し、それ以前は三洞区に含まれていた。白山はセメント工場の影響を最も受けている地区である。スポーツ会、9月の祭り、どんと焼きなどの活動を行っている。スポーツ会は体育館で行っている。会議は集会所で行い、現在は白山コミュニティセンターとなっている。奉納踊りは、観照寺の祭礼に合わせて行われている¹²。

例：元池青年同志会

1947年発足。この時から、盆踊り大会、見渡神社秋季祭礼への協力、道路工事の奉仕活動などを行っていた。人数減少の対策として、退会年齢を上げている。現在でも活動しており、8月の盆踊り、11月の祭りを行っている。

青年団

大正～昭和時代（戦後）には、大越村を1団体とし、上大越に9つ・下大越に7つの支部を置いた。大越村青年団は、団員の結束が強いことを誇りとして、講演会、旅行、運動会、遠足、剣道、盆踊りなど数多くの事業を行っていた。昭和になると青年団活動は、戦時体制に組み込まれていった。戦後には1946年には大越町青年団が発足している。15歳以上25歳までの者によって組織され、活動は公民館の行事と連携しながら合併前の大字分団が中心となった。大越町青年団、栗出・早稲川・上大越・下大越・牧野の分団があった。5つの委員会（文化委員会、家政委員会、体育委員会、産業委員会、社会委員会）で構成されており、年に多くの行事を開催した。大越町青年団は、1961年に事務局を公民館内に置いた。1964年に、大越町連合青年団が発足し、大字ごとの青年団として活動した。栗出のみは現在も活動中であり、下大越は近年に解散し、牧野は2005年（平成17年）ごろに解散、上大越は1994年（平成6年ごろ）解散した。上大越青年団は8月15日に盛大な盆踊りを行っていたが、もう解散をしていて盆踊りは大越地域全域の住民対象の「鬼の里納涼夏祭り」として受け継がれている。

¹²大越行政局職員へのヒアリングから[巻末資料 ヒアリング NO.20]

婦人会

大越町婦人会は 1946 年に結成された。町内各小学校の運動会に参加し、大越劇場での映画会に参加するなどの事業に参加した。婦人会は青年団と同じように大字ごとに結成された組織であったが、現在ではもう全て解散をしてしまった。

婦人クラブ

婦人会が解散し、婦人クラブというのが、結成された。活動目的が婦人会とは異なる。

老人クラブ

1964 年に牧野老人クラブが結成されたのが始まりであるとされる。1966 年までに栗出・中部・三洞・白山・町郷・上北部・南部・西部・入三洞・早稲川・牧野の 11 クラブが結成し、当時の会員は 512 人であった。1978 年には大越町老人クラブ連合会という組織をつくり、1970 年に、総合老人センター建設を要請した結果、1973 年に老人憩の家「寿楽荘」がオープンした。現在でも老人会は行政区単位で存在しており、60 歳からの希望者は入ることが出来る。例として白山老人クラブは、1977 年の事業では、老人作品展への出品、老人学級を年 3 回ほど行っていた。

スポーツ会

大越地域では、大越町の時から健康なまちづくりを目標に掲げていることもあり、スポーツ会による活動が活発である。スポーツ会の活動を行う場所は、下大越のつつじヶ丘総合公園や上大越の体育館などである。

例：白山区スポーツ会

実際に運営するのは青年会が行っている。行政区長が人を集めたいときに、スポーツを目的とすることで人が集まるのではないかと考え、結成された組織である。

その他の地縁組織

白山もみじ会

年齢制限のある青年会を脱退した住民により結成される組織であり、活動は人数が少ない白山青年会の活動支援を目的として活動している。26 歳から、老人会に入るまでの 60 歳までが入会する。活動継続が困難である状況に問題意識を感じた住民が立ち上げた。

実年会

下大越地区において、若連を脱退した住民で結成した組織である。

消防団

前は 6 団体あったが、今では 3 団体である。6 団体の時は、上大越は 2 つあって、あとは各大字ご

とに存在していた。今は、白山と早稲川、下大越と上大越の上の方、牧野と栗出の3団体が活動する。年初めに各消防団による出初式があり、春と秋は田村市全体で行う検閲がある。統合は田村市で決める。

敬老会

大越地域全域規模で活動を行う。活動は大越体育会で行う。年に数回の活動がある。

■地縁組織活動の実態

地縁組織活動の実態把握するために、住民にヒアリング調査を行ったところ¹³、活動を活発に行っていた組織は、集落単位の活動をしている青年会、若連などであった。集落単位が強い結束力のもと、活動が可能な単位であるといえる。

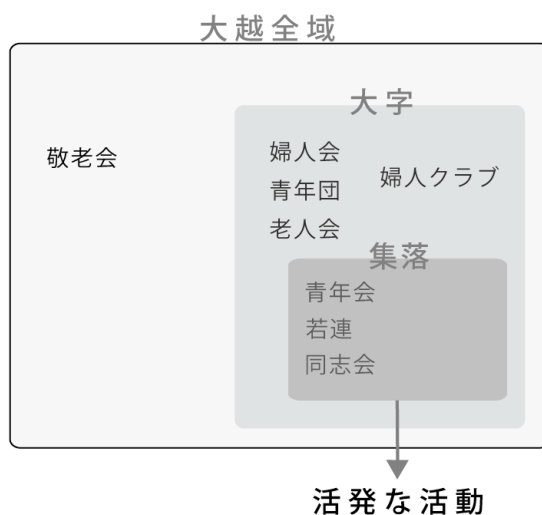


図 2-13 地縁組織活動

¹³ 巻末資料 住民組織活動から

■活動拠点

活動拠点は、大越地域の中に多く設置されている集会所・公民館である。集会所と公民館の位置を図2-13に示す。多くの集会所・公民館は集落規模で、公民館は行政区単位で設置されている。設置費用は、ほとんどの集落では住民が協力して出し合い、行政からの支援は少額出のりだけでつくれた。新しい拠点として、白山コミュニティセンター、牧野多目的交流センター、早稲川多目的交流センター、田子屋コミュニティセンターがある。その中で、田子屋コミュニティセンターは、まちづくり組織の構想の上で地域住民で資金を積み立てて建設することに繋がった拠点である。



白山コミュニティセンター



田子屋公民館



檀野平集会所



川向集会所



川柏公民館



明部湊集会所

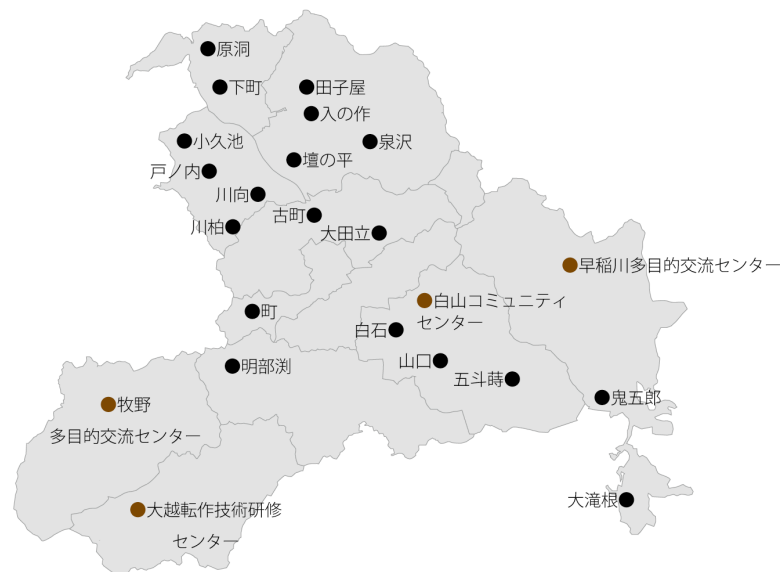


図 2-14 集会所と公民館の位置

地縁コミュニティごとに拠点が存在しているため、地縁コミュニティの結束は強くはなるが、他コミュニティとの交流はないものといえる。しかし多くの集会所・公民館は建設されてから30年ほど経過しており、老朽化が目立ち、今後の建物の利用面で問題があることから、今後の長期的な地域の拠点としての役割は期待できず、地縁組織の活動を妨げる危険性がある。白山コミュニティセンター、牧野多目的交流センター、早稲川多目的交流センター、田子屋コミュニティセンターの新しい拠点は、地縁組織活動の場であるよりも、現在活動が活発であるまちづくり組織の拠点であるといえる。

—まとめ—

地縁組織活動の問題意識・目的共有・行動

現状では、結成当初の問題意識というものは受け継がれていない。ヒアリング調査によって明らかとなった「人数が少ないからなんとかしなければならぬ」という問題意識は現状の大越地域に対しての問題意識から変化した結果抱いたものとする¹⁴。2章で明らかにしたように、地縁組織というのは、「地域の一員であるために義務として加入する」という特性が強く、習慣であった。地縁組織は地縁コミュニティによるものであるため、活動範囲と構成する住民ともに地区限定である。その地区限定であるからこそ、結束力があり、活動の目的共有が可能であった。しかし、そもそも地縁組織は代々当たり前のように住民は加入するという習慣的なものであったことから、現在では問題意識からの目的共有ができていない。その点が、人数減少と生活スタイルの変化を背景として活動が維持できず、次々と解散している一つの要因であるといえる。

その中、地縁組織ではない、新たな住民組織としてまちづくり組織が結成され始めた。次節でその実態について把握する。

¹⁴ 大越地域住民へのヒアリングから

2-2-2 まちづくり組織による活動

地域に対しての問題意識を持ち、問題解決のために活動するまちづくり組織がある。大越地域で活動をするまちづくり組織の会長へのヒアリング調査から、まちづくり組織の特徴について述べる。ここでは、大越地域内で住民自ら立ち上げたまちづくり組織について取り上げる。対象は、大字・牧野の「牧野ひまわり会」、行政区・町郷区中心の「鳴神華の会」、大字・上大越の「我が里を考える会」、集落・田子屋の「田子屋地域づくり推進会」である。以下の図 2-14 にまちづくり組織の活動範囲を表す。

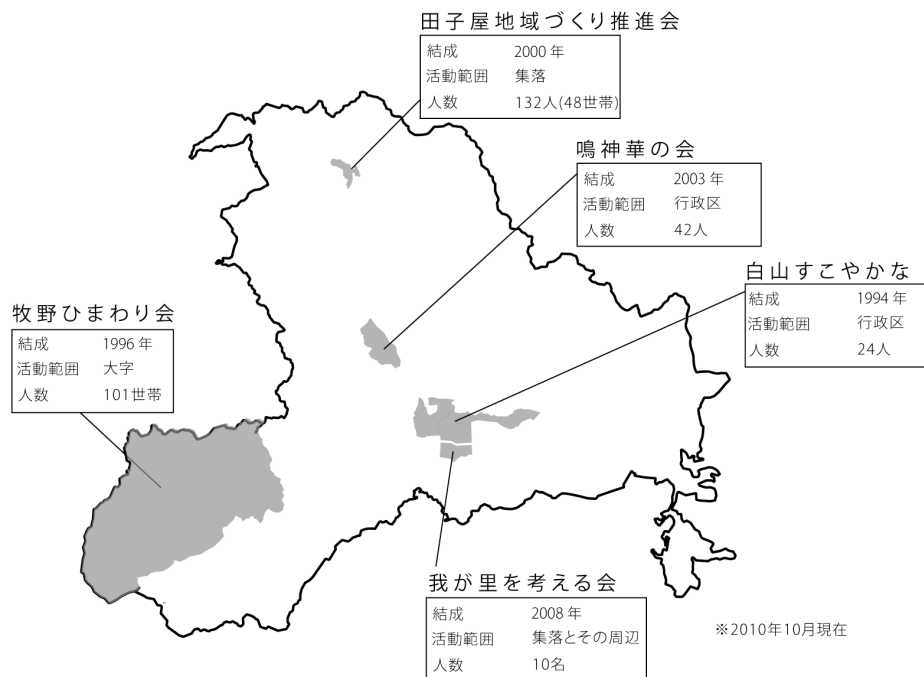


図 2-15 まちづくり組織活動分布

まちづくり組織は、地区限定的で活動され、それ以上の拡大もなく、地域間の連携もない。各まちづくり組織の活動内容と活動規模と問題意識について把握する。

1)牧野ひまわり会

まちづくり組織名	牧野ひまわり会
結成目的	牧野地区では、1993年度(平成5年度)から大規模区画ほ場整備が実施され、営農体型や景観も大きく変わってしまった。以前のような自然環境や人間関係を取り戻せないかと、手始めに、当時テレビで話題であったひまわりの植栽を行った。有志により会員募集を行い、約90戸の賛同を得て、国道沿い、町道沿い、河川沿いに約5000本のひまわりを植えた。満開となった8月に花見を兼ねて設立総会を開催し、正式に「ひまわり会」が発足した。
結成年月	1996年4月
結成時の人数	16人
現在の人数	101戸の住民 基本的に結成当初から全戸加入であり、特に全戸加入にこだわった訳ではなく、有志が呼びかけたら、牧野住民が応じた。
資金	年会費1000円 他に助成金をもとに活動している
活動内容	はじめは、ひまわりの植栽しか行っていなかったが、段々活動内容も、活動規模も広がってきた。活動内容が広がる中で、ひまわり会の活動として適切でないものもあるのではないかという意見も出てきた。活動機会が多くなることで、継続的に参加することが困難になったという見方もある。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ひまわり・コスモス植栽 ・ 愛宕山つつじ公園づくり ・ 高柴山登山道沿いの公園づくりとアジサイ植栽 ・ ひまわりを使った特産品づくり ・ ひまわりコンクールの実施 ・ イルミネーション。12月第1日曜日。 ・ 県の花いっぱいコンクール出品 ・ イベントへの参加(町、小学校の文化祭) ・ 高柴山でのイベントと出店 ・ 牧野地区の行事への参加
活動範囲	愛宕山、高柴山(牧野地区のみ)
活動拠点	総会は毎年5月に1回行う。場所はセンター。古いセンターもひまわり会では毎週使っていた。現在では牧野多目的交流センターで議論をしている。 前センターは牧野地区でつくったセンターであり、 現センターは田村市が合併後の大越町の中で初めてつくった建物である。

牧野地区は歴史と空間的特徴から、大字としての結束が強い地区であるため、住民が立ち上げたまちづくり組織としては大規模な会員数であり、活動も非常に活発である。以前に活動範囲を拡大して上大越の大越行政局の周辺にひまわりを植えたこともあったが、人出が足りずに上手くいかず、牧野中心の活動に再び落ち着いた¹⁵。

活動はじめの時期から、活動内容が珍しいとしてすぐに取材がきたことがあることから、2005年の田村市誕生前からも活動も活発であり地名度もあったといえる。行政からの補助金も積極的に受け取っており、田村市となったことでイベント情報の広報誌掲載で活動のPRがされ、牧野地区にとっても牧野ひまわり会にとってもプラスに働いている¹⁶。



高柴山での活動



遊休地を使ったひまわり畑



イルミネーションの様子

—まとめ—

問題意識

- ・問題意識→大字 牧野地区の問題共有から始まった組織活動であり、今も牧野活性化のために活動。

目的共有

- ・問題意識を牧野地区内で共有し、問題解決のためという目的を共有した。

行動力

- ・目的共有をして、ひまわりを植える活動をするという行動力に至った。

解決された課題

参加人数の増加→イベントPR、活動PRが上手くいった。田村市となったことで、より告知能力があがり、イベント参加者が増えたといえる。活動も活発であり、問題意識をもっている牧野地区範囲内の活性化につながっているといえる。

¹⁵牧野ひまわり会 会長へのヒアリングから。[巻末資料 ヒアリング 2010 NO.33]

¹⁶牧野ひまわり会 会長へのヒアリングから。[巻末資料 ヒアリング 2009 NO.9]